

飯田先生のご退任と今日の母校を思う

飯田先生が退任されることを知り、とても寂しい気がいたします。飯田先生の慧眼に接し、ご指導いただいた私にとって、ゼミナールは母校と私を結ぶ強い絆であったからです。楽しい思い出しか記憶にありませんが、60 年安保闘争直後に飯田先生の熱情あふるご指導をいただいた私には、在学中、先生から常々「事実をただ事実として受け入れるだけでなく、批判的な視点に立って事実を見ること」を教えていただいたように思います。そして、そのことが、今日の私の生き方に少しなりとも影響を与えてくれたように思います。

さて、そんな私が、最近母校の在り方に少々疑問を抱きましたので、辛口ですが、一筆啓上した次第です。

今、日本の教育の荒廃が叫ばれ、見直しが求められておりますが、職業柄、文部省教員海外派遣事業に 10 余年に亘って携わってきた私には、幸いに欧米をはじめ世界各地の学校、教育施設等を見学するばかりでなく、各地の教育長や数多くの教育関係者との話しあいを通して私なりに日本の教育の現状と将来に不安と危機感を持つに至りました。率直に言って、現在の教育は、個性をつぶし、創造性の芽を摘みとり、ただ計算技術と暗記力のみを押しつけているとしか思えません。

このことは、典型的な例として受験戦争に如実にあらわれています。試験の成績だけを評価し、重視するシステムが全国の学校、官公庁、一部の民間企業にも「はめこまれている」わけです。その結果はどうでしょうか？ そこには、ペーパーテストの成績が良く、何事にもソツがなく、しかし感情起伏のない、個人の気持ちをおもいやるといふ心配りのできない心身ともに非健康人間ばかりが固まっているではありませんか？ こういう人たちが、国際化の流れのなかで、果たして将来競争し得るのでしょうか。

母校慶応義塾にもこの傾向があらわれています。むしろ年々、その傾向は顕著になっているように思えます。今や、早稲田と並び称せられ、人気も絶頂、入学試験も最難関となった我が母校は得意満面、一方ではスポーツではまったく昔日の面影はなく、福沢精神の継承も形骸化して、運悪く東大へ入学出来なかった学生のたまり場となっているではありませんか。

塾当局にこの悪しき傾向、墮落を止め、改革しようという意欲はまったく感じられず、人気におぼれ、真剣な努力はまるで見られません。むしろ放置して、このまま人気大学、「東大二部」となるのをやさしく見守っているというところでしょう。

教職員もアルバイトや兼職をやめ、もっと塾のために時間と労力を注ぐべきではないでしょうか。人材も OB だけに固執せず、他大学 OB や、一芸に秀でた人や民間、官界の奉職者の採用をもっと検討すべきではないでしょうか。

塾を卒業した最近の OB は、妙にお行儀がよく、少し品無く云々と去勢されたかのような印象をうけますが、如何お思いでしょうか。外界を見てみようとしぬ人たちには、理解しにくいでしょうが、一部には、「慶應閥が日本をダメにする」という暴論があるくらいです。

穿った見方で云いますと、純粹培養の仲間同士が、祖先からうけついで遺産を管理しながら、自分たちだけしか得られない甘い配当を受け取り、自分たちのこの良き環境を絶対死守しようと、脇目もふらずガードを固めている感じがします。つまり今の世相は、いかに受験が大変なものになろうとも、塾には巡り巡って暖かい風が吹いてくる巡り合せになっているのです。塾は天佑というべきでしょうか、いつも「ついている」のです。余計なことは考えなくても安泰なのです。

でも、最後にひとつ、ふたつ気に入くないことをあげましょう。

ニューヨークに高校なんかぶっ建てて、どうするんですか。売名行為にしか思えません。恐らくOBの多い一流商社の駐在員あたりの酒席に出た話あたりがそもそもの発端でしょう。むしろ、今の組織内にある付属中、高を施設のにも、人材的にも充実させ、勉強だけでない芸術、体育、国際交流等の分野を設置して、個性を磨く教育、創造性を涵養する授業にもう少し真面目に取り組むべきではありませんか。

もうひとつ。藤沢に新たなキャンパスだってあえて作る必要があったのかどうか。一連のプロジェクトは、教育機関のそれとは思えません。完全に株式会社の手法です。

今や世にいくらでも働く職場はあります。しかしながら、エリート(塾OBをあえてこう呼びます)に向く職場、またエリートでなければこなせない職場は、確実に減っているということです。

それでも慶應義塾は永遠に不滅なののでしょうか？